



町民文芸

只見短歌会 令和七年六月詠草

結び目を解くが如くしどろもどろの我に初診医は丹念に問ふ
目黒 富子

久方に会へて嬉しや姪と孫我が足元に黙し手を添ふ
関谷登美子

三本指を立てるに難し三歳の息子の指はピースのサイン
立花 奏音

見守られベビーカーに乗り眠りぬし孫は店にて安心しきる
新国由紀子

夕焼けを背に受けながら畑に居る我が頭上では鳥鳴きをり
渡部ヨリ子

只見俳句会 六月定例会

父の日に今夜酒食の初鯉
睦子

若杉の秀の天をつく涼しさよ
礼

伸びいたる土手の八千草風うけて
追悼 修一

遺影にはそのままの笑顔夏の雨
この欄に戻らぬ句友青田風

草臥れて草刈る頃や時鳥
昼寝せぬ孫傍らに爺眠る
信

夏めくやグラウンドこがす球児達
熱々の大判焼や若葉冷え
都

輪ゴムとぶ8の字示す柏餅
夏の夕田の青さより畦の青
味代子

十葉や毅然とありし日を偲ぶ
家族愛溢れる句が好き柳絮飛ぶ
追悼 一恵

在りし日の友の小梅と俳句かな
友逝く日雨に一輪赤い薔薇
追悼 真理子

